

日本プロレタリア文学集・7



プロレタリア文学集・7

井和喜蔵集

日本プロレタリア文学集・7

細井和喜蔵集

定価 二六〇〇円

一九八五年九月二十五日 初版

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三三〇一七一一
振替 東京 三一―三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・7

細井和喜蔵集

目次

死と生と一緒	五
或る機械	一三
女給	二二
モルモット	三
奴隸	元
工場	二六四
解説	小林茂夫 四七
発表年月日と掲載文献	五〇一

死と生と一緒

一

彼女が彼と結婚してからまた三年にしかないのに、もう三人も子供がうまれた。そうして今四人目の子が宿っている。彼女は年子をうむような女子^{おんな}だけあって、五ヶ月にもなると随分よく眠だつ。まるでセメン樽のような膨れ腹を抱えて、毎日毎日工場へ通っている。上から下まで真ッ黒い着物を着、脊中には一歳の子を脊負^{せお}つて、工場で履く上草履や工具杯^{かき}を提げ、暗いうちから出かけゆくのだ。彼は二歳の中の子をこれまた脊負い、三歳のうえの子を無理矢理に歩かせて彼女の後から続くのである。

工場には保育場があつて、其処には通勤者の子供が大勢預けられている。子供達の親は皆工場で働いていて、九時

と昼と三時と、僅か十五分きりの休憩時間に乳を与えにくのだ。その紡績工場では、男子一人の労働で、妻子を養つてゆくだけの収入がないので、誰も彼も夫婦共稼ぎをやっている。朝五時の一番汽笛が鳴ると、すやすやと眠っている子を引き起こし、よく眼が覚めないで泣く奴を、曳きずつて夫婦づれで工場へ伴れてゆく。そしてすぐ保育場へ預けて了い、自分は食堂で飯喰つて仕事場へ入る。仕事は至極簡単、一日に幾万回となく同じことを繰り返す。一日働き終れば、保育場から子を伴れて帰り何もしないですぐ寝て了う。飯は無論工場で済ましてくる。で、家には殆ど釜の必要がない、これが紡績工の家庭生活である。極度に分業の発達した紡績工業では、一人が一本の糸の幾百分の一かを造っているにすぎない。

彼と彼女も矢張りそうだった。自分の人格を幾百万片^{べん}となく細かくきざんで売っていた。しかし自分はそれを識らない。彼の家にはへつついがあつても、それで飯炊くことが殆どない。世帯持つてから三年にもなるのに、一ヵ月と続けて家でご飯を炊かない。

その工場は評判の悪い工場だった。時間が長くて賃金が廉く、仕事に骨が折れるというのだ。おまけに工場設備が不完全で、棉塵に侵されて呼吸器病に罹る。殊に夏^{なつ}は酷

い。外の温度が九十度以上も昇るような時でも、糸が切れるといって窓を開けさせない。そのうえ噴霧器が据え付けられて居って、百五十封度からの水圧で絶えず霧を吹いている。軸や機械の回転によって、その摩擦面からは高い熱が発散し、温度は一層加わって百度に近い。そうして霧の爲めに空気に八十パーセントもの湿気が含まれて居るのだから、蒸し暑いことつたらない。こんな工場だから仲々行き手がなく、自ずと人手に不足を感じる。

「どうだな、仕事は出来るか。仲々暑いだらう。」

彼がその工場へ始めては入り、機械の見習いに就いていると上の奴が傍らへ来てこういった。

「へえ、初手の二三日は逆も動まらんかと思いましたが、馴れりやこれくらいのことやります。」

「そうか、まあ気張ってやって貰おう。この会社は辛抱する気のあるものなら色々と面倒みるからな。そのうちに更めて話そう。」

上の奴は去った。彼は上長から親く言葉をかけられたのが嬉しかった。それで後生大事と働いた。十四時間の長い間少しも休むことがない。機械そののけに働く。過労によって自分の生命が消耗されてゆくや、そんなに働いた結果、利益は誰の懐に帰するかといったことは、彼の考える

ところではなかった。唯働けばいい、人間は働きに生まれてきたのだと習った。「稼ぐに追いつく貧乏なし」という諺もある。稼いでさえ居りやまあ喰ってはゆける。そのうえ何時かは金が溜るのだ。こう考える。

なる程彼の考えはあやまらなかった。毎日六十五銭の日給の上、更らに二歩という歩増しがつき、兎にかく工場にさえ出りや七十八銭の金はとれる。そうして工場で飯を喰えば僅か一日十二銭、家賃を払って小遣つかつても月十五円くらいは残る。彼は実に有難く思った。賃金制度に感泣した。

彼が田舎で百姓していた時には、一円の金にも縁が遠かった。農産物を売ることがあつても、凡ては家長である兄のものとなつて了い、彼は半期に十円か二十円の小遣しか与えられなかった。十円という金は、どれ程貴かつたであろう。それが一度都会へ出てからというものの、一ヵ月十円からの金が残るのだから、金の成る木にでも出逢つた心地だ。全く彼は悦んだ。

「どうでえ新しいの、暑からう。お前よく辛抱するな。此処で一ト夏越す者はすくねえんだぜ。お前全く感心だ。」

古参の仲間がいう。

「なに、暑いちゃうたつて田の草とりに較べりやあ別に何

でもありませんよ。」

彼はこう答える。あの沸騰するような炎天の青田で、四ツん這いになって田の草とることを思えば、或いは幾らかましだったかもしれない。彼は田の草とりに比較する。

「よう新しいの、十四時間も働いてお前、六十銭や七十銭の端た金貰って、おまけに小言許りいわれてエライ仕事して本統に詰まんねえなあ。」

他の同胞がこうきくと、彼はすぐもつと酷い軍隊生活を考える。軍隊で三年間もただばたらきしてきたのだ。それでもどうも仕方がない。そう思えば工場の労働は有難かった。

その工場では何時の程からか、労働者の足止め策として、結婚奨励法ともいうべき規則ができていた。内容は漠然たるものだったが、男工と女工とが会社の許可を得て結婚する場合、会社から祝いとして若干の金子と世帯道具を給与することだった。その代り其の給与を受けたものは、結婚後三年以内に余所の会社へ転ずる訳にゆかなかった。

此の政策は非常に有効だった。何分子ができれば廉い賃で預かってくれるし、社宅は貸してくれるしするので、結婚の多いこと一年に三十幾組の夫婦ができあがった。結婚すると不思議にまた辛抱するのだ。

正式に結婚しない男女の関係も、喧くいえば居なくなるので放任してあった。女工寄宿舎へ男工が泊まりにいったり、寄宿の女工が外で泊まってきたりしても、黙って見逃す場合が多い。放縦きわまるものだった。

彼の純朴さはすっかり上の奴の氣に入り、なかなか受けがよくなった。彼が入社してから半年も経ち、暑い一と夏は越して了った。

「この夏入社した奴はなかなか性が良いですな。彼奴は見込みがあるから早速嫁の世話して、社宅へでも入れた方が安全ですな。」

「左様、組長に云いつけて誰かとりもたせたらいいでしょう。」上の奴がこんなことをいう。

二

十二月二十七日は工場の運転仕舞いで、夜昼休む隙なく一年中廻わした機械を、一週間許し休ませるのだ。労働者が休むのも、一週と続くことは正月きりよりない。男女工達には休みが一等嬉しがられる。

正月休みの一週間には、五ツ組の夫婦ができあがる筈になっていた。そのうちのひと組が彼と彼女であったのだ。

姑息な算盤から割り出して、会社は五ツ組の新夫婦を祝福した。社宅は供給され、粗末乍らも世帯道具の一通りは運ばれる。

彼女は永いこと寄宿舎に居り、友達は大勢あるし、部長ではあり呉服屋や小間物屋の取り次ぎをして居ったので貰い物が沢山ある。寄宿の友達是有志五十人で筆筒一棹を贈り、呉服屋は一ト重ねの衣裳を贈る。小間物屋は頭の道具一切を祝うといった騒ぎだ。それは彼女が、女工相手に何千円という高い出入商人に、買いつけや集金の便宜を与えたお礼で、ずっと以前からの習慣になっていた。

彼の友人はこれ亦出し合わせて夫婦膳を買って贈った。組長が一人で戸棚をくれた。こうした貰い物に対して土地の習慣として彼等は返礼に饅頭を配り、愈々家庭生活が始まったのである。彼女は女工寄宿舎から出ることができた。しかし皆から折角こうして貰った世帯道具を、使用する時は年に一ヵ月とない。飾り物に過ぎなかった。

彼女が彼女と一緒に居るようになってから五ヵ月目に子が生まれた。人々は不審に思い、なかには前の男の子だというものもあったが、彼は何とも答えなかった。初めのが男で次ぎが女、三番目が男だが、どの子もどの子も胎毒でもって体が石炭の焚き殻のようになって居る。工場に病院があつてそれに

診て貰いはしたが一向癒らないので放任しているのだ。うちでも上の子が一番酷い。生まれてから此方べつたらと出続けて、保育園でも遊んでやる子供がない。痛いので頸を縮かめて、隅っこに小さくなつて居る。育婦達もその子の傍へ寄ることを嫌った。彼でも彼女でも、不憫とは思ふのだろうが、全く手のつけようを知らないのであつた。

彼は彼女と一緒に居るようになってから、よし子供ができたとしても、一人でいる時分よりか金が残つた。二人稼いで月末の勘定とつた時、四十円の貯金は容易にできた。時々貯金の通帳を出して「矢張り働かにならんものだ。箸片しもない一本腕から、これだけ溜めたのだ」と独り言う。

三

彼女は四回目の腹が、漸次膨きくなって臨月が近づいてくる。

「子許しうんで金遣いあがつて……」

日頃酒杯飲まない温順い彼が、或る勘定の晩どうしてか大変酔つて歸つた。そして彼女が、「もう来月の末あたり産まれるかもしれないから、何時もより二十円だけすけな

く貯金しよう。」と言ったのを突り声で怒った。

「何やって……子許しうむって。何もな、わてはうみたいこたあれへんけど、おまはんが拵えるんやないでか。」

「なんかしてけつかる。われが居らなかつたら、子なんか出けへんわれ。」

「おまはん何云うんでよ。おまはんさえ傍へ寄ってきいさいせな、腹なんか膨れへんで。」

兩人は飛んだ喧嘩を شدした。

「なあ、われと餓鬼^{がき}さえなかつたら、わいはもつと思うことが出来るんだ。本統に餓鬼許したれてわいを苦めやがる。」

「おまはん今日はどうしたんで。氣でも違つたんでないで。子があつても余所と違つて二千円も貯金したやないか。何をいうんだえ。罰当たりなこというもんでないわ。」

「ペラペラ饒舌^{しゃべ}りやがるな。癪に触れることがあるんだ。」

「わての口でわてが喋べるんがどうしたんで。氣に入らんので。」

彼女も容易に敗けない。彼はもう相手が自分の妻であることを忘れていた。そうして彼女の頬つべたを思いきり平手で撲った。

「おまはんわてを叩いたでよ。」

喧嘩は愈よ本物になり、二つの異性が劇く争闘し始める。子供が眼を覚まし吃驚^{びっくり}して泣く、彼が大声にて怒鳴る、彼女が切れるような声で口答えする、はては小道具が飛んで壊れる音がする。

社宅の夫婦喧嘩は珍しくないので誰も仲裁に入る者がないが、彼と彼女の喧嘩は滅多にないので、近所から駆けつけた。漸く分けて双方訊いてみるが別に大した原因がない。そうして彼女は出てゆく的一点張りだ。

「わては誰か止めてくりやはつてももうよう居まへんのや。あんな人の処に居つたら了いの果は殺されますよって。」

「あんだ、そんな肥^おきな腹抱えてどうしまんのや、一体何処へ行く積りだ。」

隣りの細君がいつでも、彼女は頑として応ぜない。

「三年が間な、わてはあの人に敗けて勘定取ったことおまへんのや。貯金がつて半分から上わてがしていまんのやよつて出る処へ出てわての分だけ貰います。」

「あんだ、こんな些細なことで離縁する氣か、子供の三人もあるのにそれはあんまりやで。」

「子供はあの人が拵えたんやよつて自分で引き取りますやろかいな。わてはこんな意氣地無しと一緒に居らんでも寄宿へは入って独りでいます。」

彼女は飽くまで家出を主張するのである。

職工街の夜は更けてゆく。夏の宵の蒸し暑さも何時しか去って、涼い夜風が吹いてくる。あたりは寂寥として工場（つばね）の音のみが重苦く地響きして遠くから伝わる。と、けたたましい汽笛が鳴る、十一時三十分の夜食を報ずる汽笛だ。近所の者は明日の仕事に差支えるので皆そそくさ帰って了った。

彼女の体がみえなくなったらけれども彼は工場を休んで探してみようとしめない。小さい子供達は練乳を持たせて保育園に預け、男手で三人の子供をみて居った。行く末自分一人で育てる決心だった。が、彼女を怒らせるようになってたのが、返すがえすも後悔だった。

ところが二週間程して、ヒョコリ彼女が帰ってきた。困っていた彼は文句のあろう筈なく、喜んで無条件で家に入れ、以前の如く共稼ぎを始めた。彼女は「あの晩何のためにあんなこといったのか」と度々彼に訊いたがどうしても彼はそれに答えない。

四

今まで些（ち）とも感じなかったことだが、彼は莫迦に体の倦（だ）

いのに気づいた。家へ帰ればすぐに寝ているのに、工場で眠くて仕方がない。機械のハンドルを把（つか）っていてつい知らずに眠って計器（けいき）を過（へ）ぎしたりすることが往々あった。且つ胸がつかえたように息苦しく、時々頭のなかで早鐘をつく如き音がする。頭がフラフラッとして眩（くら）が暈（ま）いそうだ。普通の状態ではない。

彼女は漸次産み月が迫まる。今までの子ではそんなことなかったが、鬼のような彼女が仕事を厭（いと）がるようになった。そうして天麩羅（てんぷら）の海老や酸味の食物を好むのである。兩人とも蒼い顔している。人は彼女の悪阻（あくそ）が彼に伝染したという。彼も実際妻の悪阻が夫に移ることはあるのだと思っていた。「悪阻は女子の気儘から出るものじゃで、吐（は）つてでも倒れるまで仕事に出した方がよろしいで。できるだけ長く仕事をすると、お産が安おます。」年寄りがこういつて忠告するので彼女を無理に工場へ出す。すると何時しか悪阻は忘れて了った。成る程と思う。

子供達の瘡（かさ）は増々酷くこうせてゆき、上の子は眼の内部へまでも変なものが出だした。

機械は百度の暑いなかで呪わしげに運転して居った。ところが、茲（ここ）に問題が起ったのである。毎年そうしたことはなかったのに、その夏に限って糸が大変微（か）たのだ。会社が

何千円とかの損害を被った。半期から表向き彼を媒介した組長が罷め、彼が後任となつて会社から仕事を委託されているのだから、糸の徹た責任は免れない。彼は当然担うべき自分の過失だと思つた。そうして夜の眼も寝ずに考え研究したが、猶お原因を究めることができない。上からは酷いお目玉を頂戴するのであつた。彼は漸次衰弱して押せば倒れそうになつた。然し糸の徹る原因は依然として不明だ。「一週間に此の調子を直し、徹糸を出さぬようにしない時は、組長の位置は剝奪する。」工場長から最後の命令が降つた。彼は死刑の宣告を受けた如く、蒼くなつて慄えあがつた。

「あ、あのローラが悪い。あれを取り換えなかつたらあかん。屹度あの凸凹を平らにさえすりゃ糸は徹なくなる。」

彼は夢にまで工場のことをみる。それ程仕事に忠実だつた。

その日愈よローラを取り外し修繕することになった。かくして調子が出なかつたら、彼は辞職と覚悟をきめていた。彼は銅製のローラに連結されてある蒸気管を取り外しにかかつた。スッパナを持って螺子を弛め、曲形の鉄管を取り外すのだったが三本で締め付けられている螺子釘を二本弛めた時、恐ろしい圧力でもつて蒸気が噴き出し残り一本

の螺子釘を切断して了つたのである。その瞬間分離器という内筒に留まつている五十封度の蒸気が、紫色して劇しく噴出し、彼の体一面を包囲した。と、二三分の後にはその室一杯に蒸気が籠つて鉄管の口からは猶お猛烈に生蒸気が噴き出る。

吃驚して場から一散に飛び退いた部下が、汽缶場へ行つて蒸気を止めて貰い息切らしして帰つた時には、室に白い湯気が濛々として咫尺を弁ぜなかつた。屋根へ廻わつて天窓を開け放ち立ち込めた湯気を出し彼を救けたしたが、彼は全く氣絶して蒸気のために赤き水々しい海月のように膨れあがつた焼傷が体一面で、手のつけようがなかつた。

彼は迂闊りして主蒸気管の基に在る止弁を閉じて置かなかつたのだ。

* * *

氣絶した彼の体は部下の職工等によつて病院へ運ばれ、綱帯してすぐ家へつれ歸られた。病院で息は吹き返していたが、きわめて低い分からぬ程の虫の息だつたそのうちにも彼は妙な手真似をした。それはローラを機械から取り外して、表面を修理する動作だつた。夫の變事を聞いた彼女は、肥きな腹しているにも拘らず一散に駆けて戻つてきた。「おまはん……」

上り框でこう叫んで夫を呼んだが、後の声が続かない。

急に産氣づいて一步も動けなくなつたのだ。彼を搬んできた部下の男工は、どうしていいやら分らない。周章でまごつている。近所の者も大概工場へ出勤しているので、誰も寄つて来手がない。彼女は苦悶し始める。

そのうちにたった一人残っていた筋向いの老婆が飛んできたが、彼女は今最大の苦みをしているところだった。老婆は狼狽えてゐる男工を会社の産婆へ走らせたが、子はその後で産まれて了つた。

始めて空氣の絶對圧力に触れた小さな者が、変な声して泣く。此の時奥にいた彼は、「ヒィ……ン」と一度大きく息を吸い込んだ。これが彼最後の呼吸だった。

うまれた子供は女子であるが唇が二又に裂けていた。産婆は片輪だが育つ子供だという。

誰かに、三人の子供が保育場からつれて歸られた。子供は此の大事の前にも、案外平氣なもので泣きもしない。

彼の屍と彼女の脱け殻と、胎毒の子供と片輪の赤子、それらのものには頓着せず、錘の響きは盛んである。

長い夏の日も海の彼方の山に傾きかけた。狭い穢い社宅、彼女の家は臙て夜の幕に包まれる。

或る機械

昨日まで調子よく廻わっていたウォータ・マングルが、どこか工合いかまた狂い出しました。

此の機械は、左右二本の柱から成る頑丈なベツトに、直径三呎もある図太いロオラアが、三本縦列して取り付き、それを廻わすのに是れ亦素敵に巨きな齒車があります。直径が人間の身長ほどもあつて、アームは股たぶらより太く、ピッチは三吋もあるのです。驚く可き巨大な齒車です。其の巨きな齒車が、回転する音つたらありません。思わず足が竦んでしまします。高く積みあげられた、分厚い煉瓦の外郭から是れを聴く時、ライオンの唸りよりも怖ろしく聞こえます。全速度で運転している夜業の折などに、一丁も隔った処で付ち停まると、恰も地震の揺り返しのような地響きがしています。

此の機械は、黒い袴の少女達が織り上げた布を、ロオラアに咬ませて圧し潰し、布の表面を滑かにして光沢を出す機械です。力織機で織り上げた布を拡大鏡で検ると、其の経糸と緯糸の交叉された態が、宛ら莖の如く荒っぽく醜くありますが、一度此のウォータ・マングルに掛けると、アート・ペエバみたいに美しく滑かになられます。

*

あの時のことを思い出すと、身顚いし寒気を催します。あれ以来、私の多少の幸福も、全く葬られてしまったのです。何んという怖ろしい、忌むしい出来事でしょう。私は怪物のような、ウォータ・マングルを、呪咀わないではいられません。

一体、何所の誰人が、何時の頃あんな怖ろしい物を拵えたのでしょうか。拵えねばならぬ必要が、果してあつたのでしょうか。「発明史」というような本を調べれば、屹度ウォータ・マングルを発明した人の名前を載せて居るでしょう。私は其の人を怨みます。恨まないではいられません。あんな機械を発明さえしてくれなかったら、十年以前の私も、今日の私も、些とも変わらないのです。噫！あの憎む可き機械は、多くも無い私の幸福を、奪つてしましました。

併し、こんな愚痴をこぼしてみたって仕方がありません。機械は「機械」とは、運動を制限し、天然勢力をして一定の仕事をするを為さしむる装置にして、抵抗性を有する物体の、組み合わせなり。」ちよう定義に基づき、鉄や革や木の組んだ、魂の無い無生物なんですから、鑄物や材木を相手どつて、文句言つてみたところで、野暮な話し、矢つ張り是れを拵えた、創造者が悪いと考えるより、心の持ちようがない訳です。憎たらしき発明家よ！ 私は、発明家とは人道の、平和の幸福の叛逆者だと言います。発明家なかりせば、私等のような第四階級の発生もなく、人類は斯程まで不幸に陥らなかつたであらうにと思ひます。殊に、凡ての作業機械の原動機となる、スチム・エンジンやタアピン、ダイナモなどを発明した者こそ、一倍罪を負わせなければなりません。原動機さえなければ、リチャード・アークライトが紡績機械を作つても、大丈夫、運転する気遣ひはなくて済んだでしょうし、其の他凡ゆる作業機械は、是れを発明する人が現われなかつたに相違ありません。

私は、じいっと左の手を凝視^{みつ}めます。そうすると、何だか遠い遠い不幸の国へ伴れて行かれるような心持ちになつて、泣き度いような悲しさが、胸のあたりから込みあがつて来るのを覚えます。……悲しみは交流電氣の如きダイヤ

グラムとなつて、始め低く漸次高く、最高頂よりまた漸次低く下がつてゆきます。そうした一循環の悲しみのポーズが経^すぎると、今度は怒りのダイヤグラムが、前と同じような形ちに画かれます。最初低く中で高く、終りに元の低さに復す。その怒りのポーズが済むと、三度悲しみの線図が、無窮に進展する宇宙の空間に向かつて画かれるのです。若し万物を支配する神が、宇宙のどこかに在るとするなれば、其の神の玉座から人間の頭に向けて一本の線が引かれて居り、如何に数奇な運命も奔放な生活を為る者も、結局は其のラインより、多少いりくりするくらいなもので、線を中心として空間に、悲怒のダイヤグラムをつくつて行くに過ぎないでしょう。少くとも私等第四階級はです、喜樂などには、あんまり縁遠いです。

私の腕はありません。肩の部分から切れてまるつきり無いのです。袂がダラリと垂れ下がつて、見つともないいったらありません。私が十五六で、まだ「バンドル掛け」という少年労働者だつた頃、工場の風呂番が片手無しの不具者でした。私は五六人の仲間と一緒に、

「風呂番の手無し

それでも嬬別嬪

一ト晚貸せや……」